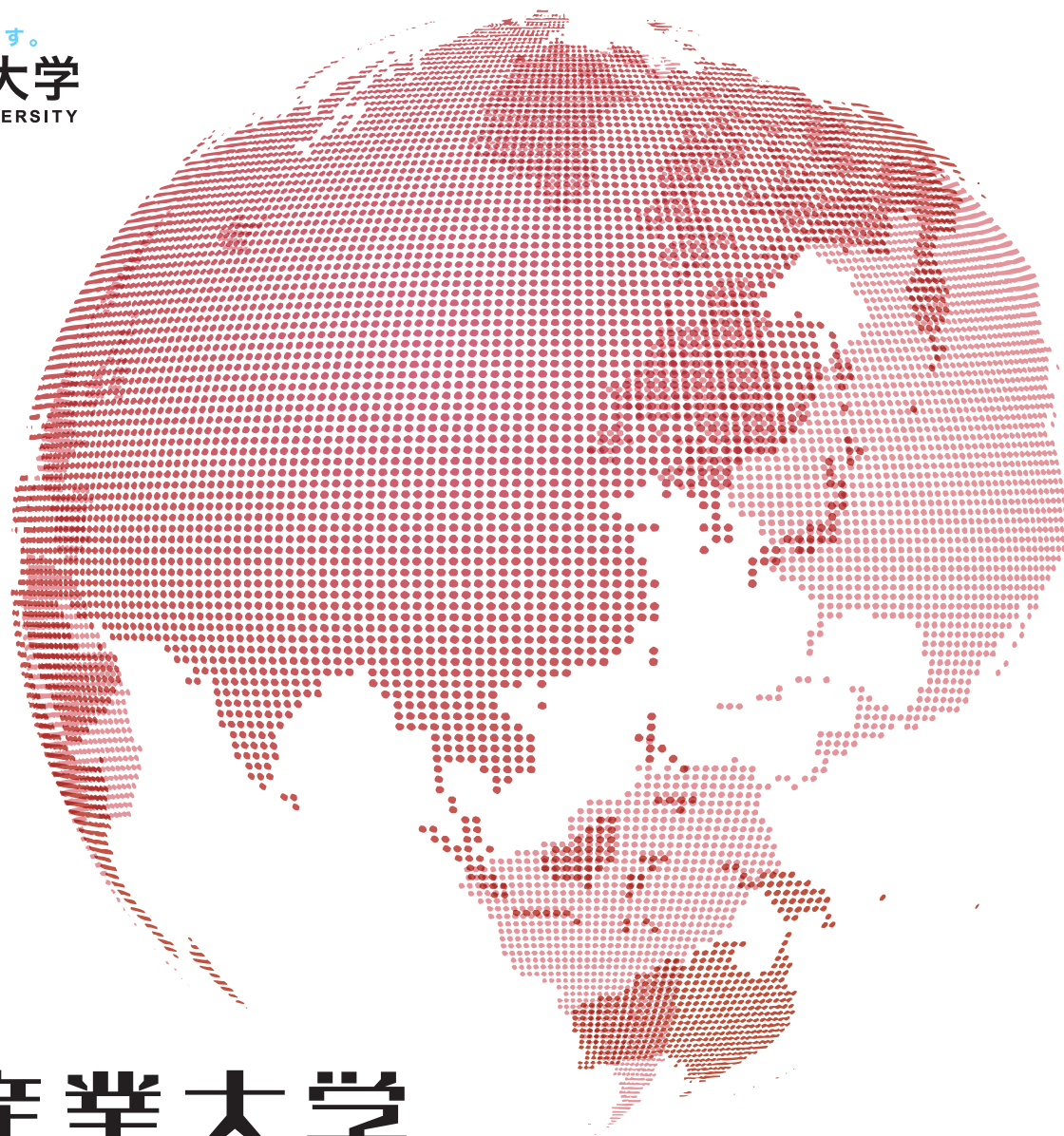




京都産業大学 世界問題研究所 ニュースレター

2025. 9 Vol.15

NEWS LETTER

CONTENTS

特集

2024 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

2

所長挨拶

4

講評

6

若泉敬記念基金について

11

【特集】

2024 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

京都産業大学世界問題研究所主催の2024 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式が、2025 年 3 月 12 日（水）にオンラインで開催されました。世界問題研究所の所員や関係者、懸賞論文の入賞者など 11 名が参加しました。

「若泉敬記念基金」懸賞論文は、長年にわたって世界問題研究所所長を務めた故若泉敬教授の寄付をもとに設置された「若泉敬記念基金」の活動の一環として実施されています。本学の学生を対象に「今日の世界問題に関するテーマを各自で設定し、副題をつけて論じる」という趣旨で論文を募集したところ、第 22 回目にあたる本年度

2024 年度 世界問題研究所「若泉敬記念基金」懸賞論文 入選者

(区分ごとに氏名の 50 音順)

二 席	
井村 安里さん (国際関係学部・4 年次)	「民主的な森林ガバナンスの有用性：インドと中国の事例比較から」
田中 こころさん (現代社会学部・3 年次)	「高齢化と家族介護—経済的背景が親子関係と介護意識に及ぼす影響—」
佳 作	
奥村 力斗さん (国際関係学部・4 年次)	「エルドアンのアサド政権に対する脅威認識の変化がもたらした歩み寄り—オムニ・バランス論をもちいた考察—」
杉 旺城さん (国際関係学部・3 年次)	「『新冷戦』時代におけるグローバル・ガバナンス：米中対立の多角的分析」
田中 翔大さん (経済学部・4 年次)	「半導体産業における海外直接投資の必要性」
千代原 祐弥さん (国際関係学部・4 年次)	「政治体制とエネルギー政策：コンセンサス民主主義は再生可能エネルギーを普及させうるのか」
南 優希さん (国際関係学部・4 年次)	「持続可能なグローバルツーリズムをめざした国際協働—パラオ共和国の事例からみた多様なアクターとの取り組み—」
山本 雄翔さん (国際関係学部・4 年次)	「近代国民国家に於ける政治力学の重層性について—激動する世界と膨張主義への逆行に備えて—」

※一席の該当者なし

は 15 篇の応募作があり、二席 2 篇・佳作 6 篇の計 8 篇が入賞しました（一席は該当作なし）。

表彰式では世界問題研究所所員の耳野健二現代社会学部教授が司会進行を務めるなか、まずは所長の岩本誠吾法学部客員教授から所長挨拶がありました。挨拶では、「今日の世界問題について」という幅広い主題を設けて数多くの論文を募り優秀作には奨学金を授与することで学業増進の励みにしてもらおうのが懸賞論文の目的であること、また、今回は 22 回目（22 年目）にあたりちょうど応募者の多くが生まれた頃に始まった伝統ある懸賞論文であるとの紹介がなされました。そして、岩本所長から入賞者一人一人に賞状が授与されました。

その後、入賞作の講評に移りました。まず岩本所長から「素晴らしい日本語で書かれた留学生の応募作品もありました。2 年連続で応募された学生さんも 4 名もいらっ

しゃいます。主催者側として、果敢に挑戦してくれた多くの学生さんの熱意に感謝するとともに、高く評価したいと思います」「15 篇は、着眼点、論文構成、分析方法など、どれも学術的レベルの高い論文でありました。そのため、甲乙付け難かったですが、審査の結果、二席に 2 篇、佳作に 6 篇が選ばれました」との講評がありました。

つづいて、二席の 2 篇について、所員の久保秀雄法学部教授から、論文の内容の紹介とともに、どのような点が高い評価を得たのか、詳しい講評がありました。また、佳作の 6 篇については、所員の中井歩法学部教授から、優れた点とさらなる研鑽を期待する点について、個別に講評が行われました。

その後、世界問題研究会 INC（インターネットクラブ）幹事の木野正博氏からお寄せいただいた祝辞が披露されました。祝辞では、「国連も十分な調停機能を発揮でき



ていない混沌とした世界で、皆さんが在学中に養った国際的センスやニュース・情報の真贋を見分ける眼を大いに生かして、日本人として、また自らの立ち位置や状況の判断に役立つよう、心掛けて下さい」とのメッセージをいただきました。

最後に、入賞者一人一人から執筆時の苦労や受賞の喜びなどが語られました。入賞者からは「データの分析で思うような結果がなかなか得られず時間を要したことに苦労した」「昨年は選ばれなかったので、今回受賞できたことが素直に嬉しい」「民主主義という概念をどう定義すればよいのか苦労した」「4万字を超える卒業論文を1万字におさめるのが大変だった」「調査などで総勢100名以上の方にご協力頂いたので、受賞が少しでも恩返しになればと思う」「4月から進学する大学院では、さらに研究を深めたい」といった声などが、寄せられました。

所長挨拶

令和6年度第22回「若泉敬記念基金」懸賞論文授賞式の開催に当たり、懸賞論文の趣旨を簡単に説明し、学生の皆さんに受賞の意義・意味について再確認していただきたいと思います。

この懸賞論文の趣旨は、二つあります。一つは、どの学部生・院生の皆さんからでも懸賞論文に応募ができるように、「今日の世界問題について」という幅広い主題を

設けて数多くの論文を募り、その応募作の中から優秀作を選考し奨学金を授与することで、応募してくれた学生・院生の学業増進の励みにしてもらうことです。

もう一つは、優秀作に与えられる奨学金の元である「若泉敬記念基金」という名称が示す通り、本学教授でいらっしゃった若泉敬先生のご功績を記念することです。

若泉敬先生は、1966年に本学に教授として着任され、1970年12月から1980年4月までの約10年間にわたり第2代世界問題研究所長を務められました。1992年の退職時には、退職金の全額を本学に寄付され、それが「若泉敬記念基金」となった次第です。

今回は、その基金を基に懸賞論文を始めから22回目・22年目、皆さんが生まれた頃に始まったという伝統ある懸賞論文です。

若泉先生のご功績は、ご著書「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」が有名ですが、佐藤栄作首相の密使として沖縄返還交渉にご尽力されただけでなく、本学創設当初から本学の発展に尽力された大功労者の一人です。

若泉先生は、文化の日にちなみ1984年11月3日付の地元新聞「日刊福井」に「読もう、書こう、考えよう」というエッセイを書かれています。「本を読み、文章を書き、心田（しんでん）を耕す（＝考える）」ことの大切さを指摘されています。

今回応募された懸賞論文は、まさに、若

泉先生が推奨されています「読み、書き、考える」を実践した成果物であり、若泉先生のお言葉を借りれば、「言語能力を涵養し、想像力と創造性を開発し、精神的貧困を克服する」ことにも繋がります。まさに、心の田んぼ、心田を耕すことになります。

世界問題研究所と同年の1966年に設立された学生団体「世界問題研究会」がありました。当時の世界問題研究会の学生さんは、直接、若泉敬先生の薫陶も受け、皆さんと同様に、真っ向から世界問題に取り組み、広く関連文献を読み漁り、真剣に論文を書かれていました。

世界問題研究会の諸先輩方が卒業後に様々な領域でご活躍されていることからわかるように、学生時代に真剣に「読み・

書き・考える」体験は、卒業後の社会人としても大いなる糧や励みになったことでしょう。

今回の授賞式に際して、OB 幹事で、学生の皆さんの50年以上先輩の本学5期生の木野正博様からお祝いのメッセージをいただいておりますので、のちほど、ご紹介したいと思います。

学生の皆さんは、懸賞論文に応募するために一生懸命に勉強されたことと思います。この素晴らしい経験を忘れることなく、引き続き、深く思考をめぐらし文化創造の実践をこれからも続けていくことを祈念し、私の開会の挨拶といたします。

世界問題研究所長 岩本 誠吾



講評

〈全体講評〉

第 22 回目の懸賞論文に当たる今回は、国際関係学部、現代社会学部、法学部、経済学部そして経営学部の 5 学部から秀逸な 15 篇の応募作がありました。例年、3 年生と 4 年生の応募が多い傾向にありますが、今回は 2 年生の学生さんもチャレンジしてくれました。また、素晴らしい日本語で書かれた留学生の応募作品もありました。2 年連続で応募された学生さんも 4 名もいらっしゃいます。主催者側として、果敢に挑戦してくれた多くの学生さんの熱意に感謝するとともに、高く評価したいと思います。

そして、「今日の世界問題」と題して応募された論文は、どれ一つ同じテーマはなく、どれも非常に重大でかつ多彩なものでした。将来を生きる現代の学生さんは、どんな問題が気になっているのか、未来社会を考える上で非常に興味深く感じました。今後とも、多様な世界問題に興味関心を持ち続けて、その解決方法を考えてほしいと痛感しました。

これら 15 篇は、着眼点、論文構成、分析方法など、どれも学術的レベルの高い論文でありました。そのため、甲乙付け難かったですが、審査の結果、2 席に 2 篇、佳作に 6 篇が選ばれました。これら 8 篇については、後ほど個別に講評されます。なお、

残念ながら入選されなかった 7 篇も非常に素晴らしい論文であったので、何らかの形で学生さんの名前と論文名をご紹介しますと思います。

受賞者の皆さん、おめでとうございます。これからも勉学に一層頑張ってください。

〈受賞作講評〉

■二席

国際関係学部国際関係学科 4 年次

井村 安里

「民主的な森林ガバナンスの有用性：インドと中国の事例比較から」

本論文は、地球環境の保全に資するような森林資源のガバナンスのあり方をテーマとし、インドで実施されている住民主導の森林政策と中国で実施されている国家主導の森林政策とを様々な観点から比較する作業を通して、参加型の民主的ガバナンスには森林減少を抑制する効果がみられることを明らかにしている。また、持続可能な参加型のガバナンスを実現するためには、ステークホルダーに対する発言権や経済的インセンティブの付与等に工夫が必要になるとの政策提言も行っている。

本論文に関しては、先行研究の成果と課題をとともに的確に踏まえつつ、マクロな統計データとミクロな現場レベルの実践をむすびつけて、森林保全と民主主義の関係を入念に詳らかにしようとしている点が高く評価された。また、自ら整理して構築した分析フレームに基づいてインドと中国の事

例を丁寧に比較対照しながら、民主主義や環境保護といった世界の大きな問題について理解を深められるような成果をあげている点も高く評価された。

■二席

現代社会学部現代社会学科 3 年次

田中 ころこ

「高齢化と家族介護—経済的背景が親子関係と介護意識に及ぼす影響—」

本論文は、世界全体で進行する高齢化とそれに伴って生じる介護問題を「世界問題」として捉え、その最先端を歩む日本において、人材不足等の事情から介護の主な担い手とならざるを得ない家族が介護に対してどのような意識を有しているのか実態を把

握し、もってどのような支援体制の構築が政策として必要になるのか示そうとするものである。

本論文に関しては、最新の全国家族調査から個票データの提供を受けて重回帰分析を行う本格的な計量研究に手堅く取り組んでいる点が秀逸である。また、分析の結果も非常に興味深く、低収入層と高収入層では介護意識の規定要因が交互作用効果により異なり、経済的な豊かさと親子関係が複雑に絡み合って介護意識を形成しているという、貴重な知見をもたらしている点も高く評価された。さらに、その分析結果から、社会全般に蔓延する家族介護の負担感を軽減するための手がかりを見出している点も高く評価された。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

奥村 力斗

「エルドアンのアサド政権に対する脅威認識の変化がもたらした歩み寄り—オムニ・balancing論をもちいた考察—」

トルコのエルドアン政権がそれまで対立をしていたシリア・アサド政権に対して 2022 年頃を境に宥和的な態度を取るようになったのは何故かという謎に迫った論文である。国家を分析単位とする脅威認識理論ではなく、指導者の物理的・政治的な脅威認識が国家の対外政策を規定するというオムニ・balancing論によって説明可能だと主張する。(残念ながら) 増加している権威主義体制における外交戦略の意思決定を分析する枠組みとして、オムニ・balancing論の有用性を証明したという点では、学術的にも意味がある。国内の脅威要因についてさらに考察を深めていくならば、地域研究としても優れたものになるだろう。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 3 年次

杉 旺城

「『新冷戦』時代におけるグローバル・ガバナンス：米中対立の多角的分析」

20 世紀後半の米ソによる「旧冷戦」と現在進行形の米中による「新冷戦」を、豊富な図表を用いながら、軍事費、経済規模、途上国への援助などの多角的な視点から比

較することで、軍事をめぐる対立構造から経済対立に変化した点を筆者は明確にとらえている。現在の新冷戦のみを対象とした論考はすでに多く著されているが、旧冷戦との比較から新冷戦の特質を明らかにしようとした点が意欲的であり、高く評価したい。気候変動や難民、地域紛争といった地球規模の諸問題の解決において、権威主義よりも民主主義のほうが優位なのではないかとする議論は、民主主義の後退の時代ではより力強い主張として読みたかった。

■佳作

経済学部経済学科 4 年次

田中 翔大

「半導体産業における海外直接投資の必要性」

現代の「産業のコメ」ともいわれる半導体産業の保護・育成は、今や単なる産業政策に止まらず国家の安全保障、経済安全保障においてもその中核を占める戦略的な意味を持つ。筆者は統計分析によって、半導体産業における海外直接投資（FDI）が持つ意味について明快な主張を展開している。FDI は国内総生産（GDP）を減らす要因であるが、外国企業の先端技術がもたらされる技術移転効果により経済成長をもたらす可能性があるので、長期的視点から評価するべきだとする。技術移転効果を評価するのにどの位の期間を見込めば良いのかについての示唆や主張があれば、政策提言的な価値もある論考になったと思われる。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

千代原 祐弥

「政治体制とエネルギー政策：コンセンサス民主主義は再生可能エネルギーを普及させうるのか」

デンマークと日本の比較の観点から、再生可能エネルギーの普及度の違いを選挙制度を根幹とする民主主義の違い（多数決型とコンセンサス型）から説明しようと試みた意欲的な論考である。より多くの人の意見を取り入れて国民主体のエネルギー政策を促進するコンセンサス型民主主義が、再エネ政策の大幅な推進により適しているとする。たしかに選挙制度は民主主義の違い

を大きく規定する要因ではあるが、論文の中ではエネルギー政策の転換において市民運動の果たした役割についても述べられている。「デモクラチ」に見られる政治文化や民主主義観の違いについても、さらに分析を深めていくことを期待したい。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

南 優希

「持続可能なグローバルツーリズムをめざした国際協働—パラオ共和国の事例からみた多様なアクターとの取り組み—」

京都においても政治問題となっているグローバル化・マス化した外発的観光開発の



課題を解決し、自律的・内発的で持続可能な観光へと転換をしていくためには、多様なアクターによる国際的協働とともに、地域コミュニティの果たす役割が重要であることを指摘した論考である。筆者の主張は自身のパラオ共和国における現地での参与観察と政府関係者に対するインタビュー調査を踏まえていることから、説得力がある。利益を重視する企業と地域社会との間でどのような形の連携・協働を目指せば自律的な観光開発が可能になるのかについて、より具体的なイメージが提示されたならばさらに良い研究になったと思われる。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

山本 雄翔

「近代国民国家に於ける政治力学の重層性について一激動する世界と膨張主義への逆行に備えて一」

近代国家をめぐる友一敵関係の政治力学について、対外的な観点と対内的な観点から重層的に、カール・シュミットとラカン、アルチュセール、エルンスト・ユンガーなどの哲学、精神分析、政治思想を幅広く取り上げて検討したスケールの大きな論考である。近代国民国家の発展は国民が主権者となった一方で、統合と動員のためのさまざまな装置のもとに組み入れられていった過程でもあった。冒頭で挙げられていた「近代国家の暴力性」について筆者はどのようにとらえていて、それに我々はどう付き

合っていくべきなのかについての明快な主張が最後に示されていれば、よりひき締まった結論になっただろうと思われる。

以上

世界問題研究所長 岩本 誠吾

同研究所員 中井 歩

同研究所員 久保 秀雄

〈その他の応募作〉

■法学部法政策学科 4 年次

江村 蒼大

「日本における在日クルド人の実態」

■現代社会学部現代社会学科 3 年次

金 岳澄

「グローバル時代におけるモソ人文化の創造的継承」

■経営学部マネジメント学科 3 年次

土島 大知

「旧住友金属工業と住友商事による米 Standard Steel 社買収に関する一考察—M&A のグローバル化と国際経済—」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次

軒端 来実

「再生可能エネルギーは真にサステイナブルなのか？」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次

平石 暖奈

「CSR 達成条件の確立—将来的な課題解決への道—」

■現代社会学部現代社会学科 4 年次

藤田 いろは

「日本とベトナムの食べ残しに関する比較研究—ベトナム人はもったいないと思わないのか—」

■国際関係学部国際関係学科 2 年次

南 怜那

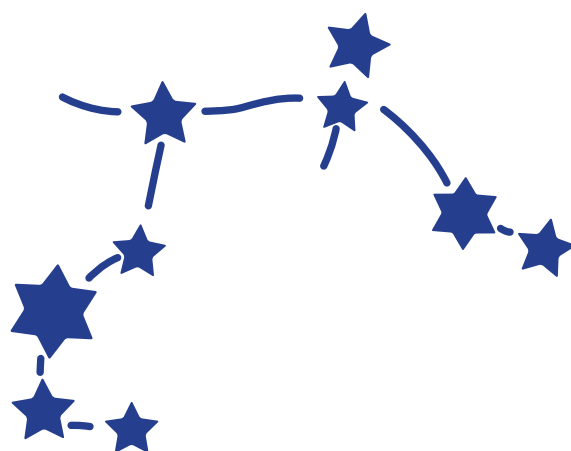
「日本におけるヘイトスピーチの存在—解決プロセスと今後の動向—」

※区分ごとに氏名の 50 音順

若泉敬記念基金について

若泉 敬（わかいすみ けい 1930–1996 年）国際政治学者。東京大学法学部を卒業し、ロンドン大学やジョンス・ホプキンス大学に留学。1966 年に本学教授として招聘され、同年世界問題研究所所員となり、1970 年から 1980 年まで同研究所所長を務める。1992 年退職時には退職金の全額を同研究所の活動資金として寄付。同研究所では 2001 年にこれを「若泉敬記念基金」と命名。若者の教育に熱心だった若泉教授の精神を学生に伝承するため、講演会開催、懸賞論文募集などの経費に充てている。





当研究所の活動やニュースレターのバックナンバーはホームページにも掲載されています。

<https://www.kyoto-su.ac.jp/research/sekaimondai/index.html>



京都産業大学世界問題研究所 ニュースレター 第15号 2025年9月

発行 京都産業大学世界問題研究所 京都市北区上賀茂本山 TEL (075) 705-1468

編集 京都産業大学世界問題研究所所員 久保 秀雄／同事務局 藤本 興子

印刷 中西印刷株式会社
